

帰還兵士の苦難

——サリンジャーの「エズメに」再読——

野 間 正 二

〔抄 録〕

サリンジャーの短編「エズメに」は、これまで多くの場合、感受性が鋭いだけでなく共感する心をもつ繊細で無垢な少女エズメとの出会いによって、戦争によって心が深く傷ついていた兵士が救われる物語として読まれてきた。しかしそういう明白なテーマの背後には、戦争によって心が傷ついた兵士は、生きて故郷に帰って日常生活を営んでいても、5年後でさえも時折その戦争神経症の後遺症が現れるという、あまり語られることがなかった帰還兵士の苦難を語った物語があることを、同時代の作品や新聞記事を参考にしながら作品を精読することで証明した。

キーワード サリンジャー、「エズメに」、戦争神経症、帰還兵士、第二次世界大戦

本文

サリンジャーの短編「エズメに(“For Esmé - with Love and Squalor”)」は『ニューヨーカー(The New Yorker)』の1950年4月8日号に発表された。「エズメに」が収録されている短編集『ナイン・ストーリーズ(Nine Stories)』(1953年)のなかで27頁を占めているあまり長くない作品だ。しかしその構成は複雑である。まず冒頭では、ニューヨークに住んでいる1950年の「私」が、この短編の成り立ちを語っている。その後、1944年4月30日の「私」が、英国でのエズメ(Esmé)との出会いを語っている。次いで、1950年の「私」がこれから語る物語の説明をしている。最後に、1945年の軍曹(Staff Sergeant) Xのドイツでの個人的な経験が三人称で語られている。

この要約からも分かるように、この短編では、場面の時間が1950年、1944年、1950年、1945年と変化している。時間のこの様な変化は、この短編集に収められている他の8つの短編にはない。また、語り手が一人称から1945年の場面では三人称に変化しているのも特徴だ。さらに場面も、米国、英国、米国、ドイツと変化している。これらからも、この短編が良く練りあげられた技巧的な作品であることが分かる。

I

この「エズメに」は、先に述べたように、3つの時期と3つの場面とからなっているが、大部分は1944年の英国の話と1945年のドイツの話からなっている。まず、前半の1944年4月30日の英国のデヴォン(Devon)での物語では、これからヨーロッパの戦場に初めて投入される直前の「私」と、貴族ではあるが孤児の少女エズメとの出会いが「私」の口から語られている。もうすぐ戦場に初めて投入される「私」は、覚悟がすべてだと理解していても(89)、もちろん戦死の不安に苦しめられている。その不安と孤独のなかでうち震えていた「私」の心は、繊細で共感する心を持ちつつ、知的で魅力的な少女と言葉を交わすことで、ひとときの安らぎを得る。つまり、人間が生きてゆくうえでとても重要ないつまでも残る美しい記憶を得たことが語られている。

後半の物語では、1945年5月8日の休戦から数週間後のドイツの都市ガウフルト(Gaufurt)での軍曹 X を中心にした場面がおもに語られている。10名からなる小隊の長である軍曹 X は、軍の病院に「神経症(nervous breakdown)」(109)で2週間の入院後、部下たちと駐留している民家に戻ってきたばかりである。病院を退院したけれども、X は顔面のチックや手の震えが止まらないだけでなく、浮遊感覚に悩まされていて、文章も読めないし、身体的にも痩せて青白く「死体のヤツにそっくり(like a goddam corpse)」(108)で、歯茎を舌で押しただけで血が出てくる。こうした X 軍曹の症状は、軍曹だったサリンジャーも休戦直後の5月に神経症で2週間入院していた(Shields 170)こともあって、サリンジャー自身の体験を反映していると考えられる批評家もいる(Alsen 385)。いずれにせよ X 軍曹はまだ病人の状態だ。それにもかかわらず部下のクレイ伍長は、X の気持ちや症状におかまいなく、X の部屋にちんにゅう闖入してきて、その粗雑な神経と粗雑なふるまいで X を苦しめる。X は嘔吐さえも余儀なくされる。それでもクレイはぐずぐずして、X が命令するまで部屋を出てゆかない。やっと一人になった X は、机の上にあった緑色の小包にたまたま目を留め開封する。小包はエズメからのものだった。手紙とエズメの父の形見の品である時計とが入っていた。手紙を読みおえた X は、初めて眠気を感じ、回復の予感をもったと語られている。ここで、この短編は終わっている。

以上の要約からも分かるように、この短編では、前半では1944年のエズメとの出会いによって、「私」がつかの間の安らぎを得て、その出会いが美しいいつまでも残る思い出となったことが語られている。それから約1年後の1945年の後半では、主人公は2週間も入院しなければならなかったほどの戦争による神経症に苦しんでいたが、エズメの真心からの心配と心遣いによって、病気からの回復を予感する前向きな気持ちになったことが語られている。

だからこれまで、この短編は、「イギリスの田舎町で出会った少女からの手紙と贈り物によって、戦争で傷ついた魂が救われる」(田中 108)物語と解説本にも書かれているように、心を病んだ兵士が少女によって救われる作品と見なされてきた。この解釈は、同じ時期に書かれ

たサリンジャーの代表作『ライ麦畑でつかまえて(*The Catcher in the Rye*)』(1951年)において、主人公ホールデン(Holden)が妹の無償の愛によって救われる物語の展開と同じ方向性をもっているから、納得しやすいものだ。同じ方向で、もう少し詳しく考察した代表的な理解には、この作品は「一人の兵士の痛々しい姿を通して戦争を告発する一方、悲惨な戦争体験から心身ともに憔悴し、人間に対する絶望感、不信感から、人を愛することができない地獄に苦悩する主人公が、一人の少女によって救済される様子が描かれている」(高橋 146)という理解がある。この理解は、1944年の物語と1945年の物語にかんする限り、過不足のない的を射た適確な理解である。

II

しかしこの高橋氏の理解からは、1950年の「私」の語りについてたいするじゅうぶんな考察が抜けている。たとえば1950年の「私」による、作品の冒頭に置かれたこの作品が生まれた経緯についての解説についてじゅうぶんな検討がなされていない。また、1945年の物語の前に置かれた1950年の「私」による前書き(解説)へのじゅうぶんな検討が抜けている。

そこでまず、短い方の1945年の物語の前に置かれた1950年の「私」による前書きについて考えてみよう。1950年の「私」は、1945年の物語を語り始める直前に、

これがこの物語の汚辱的なあるいは感動的な部分であるが、場面は変わる。登場人物も変わる。私はまだ登場しているが、これからは、私には自由に明かせない理由によって、私はとても巧妙に変装しているから、たとえどんなに賢明な読者でも、私を見分けることができないだろう。(103)

という謎めいた解説をする。そしてこれだけを語って、すぐに後半の1945年の物語を始める。

この短い解説がなぜ謎めいているかといえば、1945年のX軍曹は、誰が読んでも1944年の「私」と同一人物であるのが明々白々なのだ。たとえば、エズメからの「私」宛の小包が、X軍曹の元に届いている。そしてその手紙と贈り物にX軍曹が心をつよく動かされている。

では、なぜ1950年の語り手の「私」は、こんな事実と反する明白な「反事実」の解説をわざわざ語ったのだろうか。しかもこの「反事実」は、1945年の物語の展開にはどんな寄与もしていない。むしろ物語のスムーズな展開の邪魔になっている。だとすれば、なぜこんな余計な「反事実」をわざわざ語る必要があったのだろうか⁽¹⁾。

まず考えられるのは、語り手の「私」が、X軍曹は「私」だとは誰にも分からないだろうという明白な「反事実」を語ることで、軍隊におけるナンセンスな官僚主義や秘密主義を皮肉りパロディー化しようとしていた場合である。

たしかに軍隊には笑うべきバカらしいことが存在する。1945年の物語のなかにも、休戦後であるにもかかわらず、支給されるジャケット受けとるために、早朝5時に起きてハンブルグ(Hamburg)にまで行かねばならないという命令(108)が語られている。そして5時起き理由として、今日すでに届いている用紙に、明日の昼前までに記入しなければならないからだ(109)ということが語られている。火急の用事でないから、朝5時に起きる必要はない。ジャケットだけを受けとるのだから、わざわざハンブルグにまで一人ひとりが出向く必要もない。まとめて送付すれば済むことだ。また、用紙は今日すでに届いているのだから、今日記入すれば済む。明日の昼前に記入する必要もない。しかし軍隊の官僚主義と一体となっている秘密主義のせいで、それはできない。軍隊では兵士は、官僚主義と秘密主義とが生みだした、いかにバカらしい命令であっても、その命令に従わねばならない。そのことが、ジャケット配給のエピソードを通してこの短編でもわざわざ語られている。

だから「私」とX軍曹とが同一人物であるにもかかわらず、どんな賢明な読者でも、そのことが分からないだろうと「私」が主張することで、「私」が軍隊の愚かしい秘密主義を皮肉りパロディー化しようとしているという考えは一概には否定できない。とくに、「私には自由に明かせない理由によって(for reasons I'm not at liberty to disclose)」という部分が、言わずもがなな説明で、秘密主義を当てこすっているような印象を与えている。また、「自由に明かせない(I'm not at liberty to disclose)」の部分が、あまりにも格式ばった言い方で、滑稽な感じがするほどなのだ。ふつうの英語なら「明かせない(I cannot disclose)」で済む。だから「私」は、この部分で、軍隊における文書の仰々しい文体のパロディーを意図していた可能性はある。

だが一方で、「私」は上の引用につづけて、「私はとても巧妙に変装しているから、たとえどんなに賢明な読者でも、私を見分けることができないだろう」とも語っている。しかしまず、X軍曹はまったく無防備に登場していて、「とても巧妙に変装して」はいないのだ。事実と反する記述である。読者にとっては鑑賞不能のウソである。次に、「たとえどんなに賢明な読者でも、私を見分けることができないだろう(even the cleverest reader will fail to recognize me)」という、最上級を用いた表現には、無理な誇張が見いだせる。誇張によって、パロディーの効果を高め、読者の笑いを誘おうとしているのかもしれない。しかし、むしろ無理に誇張した言い方に、読者は白けるばかりだ。笑うことはできない。パロディーを意図していたにしろ、ここではそのパロディー化の意図は成功していない。

だから先の引用文を全体として眺めた場合、語り手「私」による、軍隊の秘密主義のパロディー化の意図を読みとるのは可能かもしれないが、そのパロディー化の意図は成功していない。そのパロディー化が成功していない大きな要因は、この前書きの部分が前後の文章から孤立しているだけでなく、あまりにも短いから、語り手「私」の意図がじゅうぶんに展開される余地がなかったことにある。唐突で説明不足なのだ。だから、もし仮に1950年の「私」が、この部

分で軍隊の秘密主義のパロディー化を意図しているなら、その意図を実現するために読者にたいするじゅうぶんな配慮ができていないのだ。それは1950年の「私」が語り手として、精神のバランスを欠いていたことを暗示している。

次に考えられるのは、X軍曹が「私」であるのが明白であるにもかかわらず、「私はとても巧妙に変装しているから、たとえどんなに賢明な読者でも、私を見分けることができないだろう」と主張するのは、1950年の語り手の「私」が、自分が語っていることが事実と反する「反事実」だとは気づいていない場合である。1950年の「私」が自分の語る明白な「反事実」に気づかないほどに、語り手としての正常な精神状態を喪失していた場合である。

要約すれば、この前書きの部分は、1950年の「私」が、軍隊の官僚主義や秘密主義のパロディーを意図していたにしろ、あるいは自分が語っていることの明白な「反事実」に気づかずに語っているにしろ、いずれにしても、語り手として精神の正常なバランスを欠いていた状態にあったことを示唆している。さらにつけ加えれば、ふつうの読者がこの部分を読めば、あまりにも短い段落で「反事実」が唐突に述べられているので、多くの場合、語り手のパロディー化の意図を読みとるよりも、当惑して、語り手が変なことを語っていると感じると思われる。語り手はこの時には精神のバランスをちょっと欠いているのではないかと感じるのがふつうの反応だと思われる。

さらに、「私」が語り手として精神のバランスを欠いていたと考えざるを得ない個所が、この前書きの直後の1945年のガウフルトの場面にもある。ガウフルトの場面の冒頭では、X軍曹の部下の伍長はZ伍長と仮名で登場している。ところが3ページ後には、なんの前触れもなく突然、「クレイ(Clay)」(107)という名前で、X軍曹に呼びかけられる。しかもこれ以降は、Z伍長と呼ばれることはなく、「クレイ」と常に呼びつづけられる。この断絶ぶりが、常識的にはよく分らない。

それまで語り手は、なぜ4度も「Z伍長」と呼びつづけてきたのかが不可解なのだ。最初からクレイ伍長と呼んでいても、物語の展開にはなんの支障もない。むしろ最初から「クレイ(Clay)」と呼んでいた方が、Clayは「粘土・泥」を意味しているから、クレイ伍長の粗雑な性格や行動を補足的に説明することになり、文学的に見れば効果的だと思われる。それでも最初の3ページでは、語り手はクレイのことをZ伍長と呼んでいる。ふつうの感覚には理解できない。しかしこのときの語り手の「私」が、語り手としての正常な精神のバランスを欠いていたと考えれば、納得できる。

たしかに、この場合でも、作品の冒頭では本名のクレイではなくZ伍長と語ることは、「私」のことをX軍曹と語っているのと同じく、軍隊の秘密主義のパロディーだと解することは可能かもしれない。しかしこのZ伍長という呼び方を途中で突然止めることによって、その中途半端さゆえに、読者にとっては、Z伍長という呼び方はパロディーとしてまったく機能していない。ここでも、もし仮に「私」がこの中途半端なZ伍長という呼び方で、軍隊の

秘密主義のパロディーを意図していたなら、その意図は果たされていない。だから、もしそのことを意図していたとしたら、このときの語り手の「私」は、語り手としての正常な精神状態ではなかったと言える。

以上の1945年の物語の前書きの部分と1945年の物語の冒頭部分とから、1950年の「私」は、語り手としての正常な精神のバランスを時として欠いていたと推測できる。

そこで次に、1950年の「私」がこの短編「エズメに」が生まれた経緯を解説している作品の冒頭部分を検討してみよう。その冒頭部分は2つの段落からなっている。前半の段落は、全文を引用すると以下ようになる。（尚、後半の段落は、前半部の約半分の長さで、結婚式に出席する代わりにこの短編を書いたことと、花嫁の6年前のエピソードを語ることと、花婿と花嫁がこの短編から教訓を読みとって欲しいこととを述べている。）

つい最近、私はエアメールで、4月18日に英国でおこなわれる結婚式の招待状を受けとった。たまたま、ぜがひでも列席を可能にしたい挙式だったので、招待状が届いたときには最初、飛行機で海外にゆくのは、旅費なんかどうにかなるから、まあ可能だろうと考えていた。しかしそれから、そのことをかなり徹底的に妻と、この妻が思わず息をのむほど判断の公正な若い女なのだが、話し合っ、そして行かないことに合意した。ひとつには、義母が4月後半の2週間を私たち夫婦といっしょに過ごすのを、私が完璧に忘れていたからである。実際、私は義母のグレンチャーとこれからそうたびたび会わないだろうし、彼女がこれからさき若くなることもないのだ。義母は58歳なのである（そのことを彼女は誰よりもまっ先に認めるだろうけどね）。(87)

この引用した文章では、1950年の語り手の「私」が、英国でおこなわれるエズメの結婚式に招待されたとき、最初はぜがひでも行きたいと思ったが、妻と話し合った結果、行かないことに決めたことが語られている。夫婦が話し合うなかで、夫が最初に望んでいたことが実現されないこと自体は、夫婦の話し合いでは良く生じることである。珍しいことではない。

しかしここで語られている「私」が断念した理由はふつうではない。説得力に欠けるのだ。妻の母が4月の後半の2週間を私たち夫婦と一緒に過ごすのを楽しみにしているという理由が、「ぜがひでも列席を可能にしたい挙式」への出席を断念した理由としては弱いのだ。

英国での結婚式は1950年4月18日で、「私」は作家で、ニューヨークのマンハッタンに妻と住んでいる。子どもはいないようだ。そして米国では1940年代に長距離国際線が確立していたから(Sddiqi)、航空機を利用すれば、4日間もあれば、英国での結婚式に出席して戻ってこられる⁽²⁾。

義母がやって来る「4月後半の2週間」は、単純に計算すれば、4月17日から30日までである。そして結婚式は4月18日だから、「私」が挙式に出席のために抜けるのは、14日間の内の

最大でも最初の4日間に過ぎない。少なくとも10日間は義母と一緒におれるのだ。常識的に考えても、じゅうぶんな長さだ。14日間は10日間になったからといって、「ぜがひでも列席を可能にしたい」計画を断念する理由とはならない。さらにつけ加えれば、義母の事情はなにも書かれていないから分からないが、英国に駐留していた「私」にカシミアの毛糸(cashmere yarn)を買って送ってくれるように頼んでいる(91)から、義母は専業主婦だった可能性は高い。義母が日程を3日間ほどずらすことも可能だったのでないかとも思われる。もちろんミドルクラス上層に属すると思われるこの家族にとって⁽³⁾、本人自身も言っているように、「旅費なんかどうにでもなる」のだ。

さらに、義母にこの4月に会うべき理由として、2つの事情が挙げられているが、その2つの事情も説得力に欠けている。ひとつの目は、義母に今後も「そうたびたび会わないだろう」という事情である。2つ目は、義母は「若くなることもない」という事情だ。要するに、義母の古い先は短いことから、この4月に会う機会を逃してはならないという事情である。この事情は、もし仮に結婚式に出席したなら、義母にはこの4月には会えなくなることを前提している。しかし先にも指摘しておいたように、たとえエズメの結婚式に出席しても約10日間は一緒に過ごせるのだ。だから、語り手があげている出席を断念した理由は説得力がない。言いがかりのような不合理な理由にすぎない。

さらにつけ加えるならば、義母はまだ58歳なのだ。58歳はまだじゅうぶん若い。古い先を考えるべき年齢ではない。「私」は本心ではそう考えている。だからこそ、引用文の最後で「私」は、「義母は58歳なのである(そのことを彼女は誰よりもまっ先に認めるだろうけどね)」という文言を、あえて最後につけ加えているのだ。もちろん、「私」がつけ加えている「(そのことを彼女は誰よりもまっ先に認めるだろうけどね)」という言葉は、反語的な表現だ。皮肉のこもったユーモアだ。義母は実年齢よりも若く見られることを望んでいる人物であることを皮肉っている。義母は58歳で、古い先を考えるにはまだ若いだけでなく、義母本人も58歳を認めたがらないほど、気持ち的にも若いと、「私」は本心では考えている。このことから、義母の古い先は短いことから、この4月の会う機会を逃してはならないという理由を、「私」自身は、本心では認めていないことは明らかだ。

そのことは、挙式への出席を断念した2つの事情を説明している「私」の語り方からも分かる。「実際、私は義母のグレンチャーとこれからそうたびたび会わないだろうし、彼女がこれからさき若くなることもないのだ」と語っている。その語り方からは、とりわけ「実際(really)」という語り方からは、挙式への出席を断念した事情を説明したこの部分は、もともと妻の言い分だったことが分かる。妻の言い分を、ウエンケも言っているように(Wenke 253)、「私」が繰り返して語っているに過ぎないのだ。たとえば、妻から「これから母にたびたび会うこともないんだし。これから先、母は毎年老いてゆくんですからね」というような意味のことを、非難がましい口調で言われている「私」の姿が想像できるのだ。さらに、この2つの

事情を語る前に、「(義母が来ることを)私が完璧に忘れていたからである」という「私」の語り方からは、とくに「完璧に(completely)」からは、妻から「あなたは、私の母のことを完璧に忘れていたでしょう」と非難がましく言われている姿が想像できる。

そして妻の言い分をほぼ同じ言い方で繰り返している「私」の姿に、妻の詰問口調に、たじたじとなって、妻の言い分を受けいれている「私」の姿を読者は想像できる。この部分に、夫婦間の会話の「不毛性(sterility)」（Wenke 253）を見いだすのは極端だと思われるが、妻の言い分をもっともだと納得したから、挙式への出席を取りやめたのではないことを、読者は理解できる。自分では納得していないからこそ、そのことを暗示するために、妻の言い分をほぼそのまま繰り返しているのだ。

たしかに「私」も、ここで語っている出席しなかった理由は「かなり徹底的に」話し合ったなかの「ひとつ」に過ぎないと念を押している。その他にも理由はあったのだ。その中の理由のひとつには、アンティコーも言っているように(Antico 327)、6年前に偶然に約30分間だけ出会った少女の結婚式に、なぜわざわざ英国まで行くのか、という論点もあっただろう。しかし、この誰もが思いつくような論点にたいして、「私」は沈黙している。ただ納得しがたい論点のみを述べている。語り手の「私」は、なぜ「ぜがひでも」列席したいと考えていた結婚式への出席を自分が断念したかを、読者にじゅうぶんに説明しようとは考えていない。この点に限れば、「私」は語り手としてはバランスを欠いた語り手だと言える。

では、妻の先の言い分を納得していないのに、「私」が結婚式への出席を取りやめた理由は何なのか。その謎を解く鍵のひとつは、この引用文の初めにある「ぜがひでも列席を可能にしたい挙式だった(to be a wedding I'd give a lot to be able to get to)」という表現にある。ちょっとふつうではない言い方なのだ。would give a lot to～(ぜがひでも～したい)というのは、ふつうによく使う would like to (～したい) に比べて、多少大仰なイディオムだ。しかもそのイディオムが、ちよくせつ get to (行く・到着する)に続かずに、その間に be able to (～できる)が挿入されている点がふつうではない。しかも、その文につづけて I thought it might just be possible for me to make the trip abroad(私が海外にゆくのはまあ可能だろうと私は考えていた)(下線筆者)と語っている。もう一度「まあ可能だろう」という表現で、海外に出てゆくのが可能かどうかを語っている。海外に出てゆくことが可能かどうかを、一文の内で be able to と might just be possible と2度にわたって気にしているのだ。つまり、このときの語り手の「私」は、「できるかどうか」が、すなわち「海外にゆくことが可能かどうか」が非常に気になっていたのだ。

しかしこの場面で、可能性について2度も考えることはふつうではない。なぜなら、客観的な外的な状況では、運賃は問題にならなし、「私」は作家という自由業だから4日間ほど自宅を離れても問題ないだろうし、このときには義母来訪の件は完璧に忘れていたからだ。ふつうなら「結婚式にゆくことが可能かどうか」を思い悩む必要はなかったはずだ。それにもかかわ

らず、語り手の「私」は、招待状を受けとってすぐに、「ゆくことが可能かどうか」を2度も不安視している。とすれば、「私」の不安の原因は、「私」の外的要因にあるのではなく、内的な要因にあるのではないかと考えざるをえない。では、その内的な要因とは何なのか。

そのことを考える前に、先の引用文の別の部分を考えてみよう。「私」は妻のことを「思わず息をのむほど判断の公正な若い女(a breathtakingly levelheaded girl)」であると、わざわざ説明している。妻にたいするこの表現は少し異常な感じがする。まず、妻にたいして「息をのむほど(breathtakingly)」に「分別ある・^ほ穩健な(levelheaded)」と言っているからだ。たしかに levelheaded が単独で使われていたら、誉め言葉として解することも可能だ。しかし「息をのむほど」と共に使われたら、さらに、内心納得はしていないが結果的に妻の意見を受けいれざるをえなかった夫が、妻を形容するときに使ったなら、levelheaded は誉め言葉にはならない。相手の性格上の欠点、つまりこの場合なら、自分が「公正」だと信じていることを妥協せず、あくまでも言い張る妻の性格を皮肉の意味をもつ。

次に、結婚して9年以上経つ妻にたいして⁽⁴⁾、「若い女(girl)」という単語を使っているからだ。日本語の「ギャル(gal?)」ほどではないが、既婚女性に girl を使うときには、とりわけサリンジャーの他の作品、たとえば「バナナフィッシュに最適の日(“A Perfect Day for Bananafish”)」や「愛らしき口元目は緑(“Pretty Mouth and Green My Eyes”)」などの作品においては、結婚はしていても「成熟した立派な大人とは言えないような女性」というニュアンスがある。だから妻のことを「思わず息をのむほど判断の公正な若い女」だと、わざわざ説明する「私」に、妻にたいする深い愛よりも、妻への批判的な目というか、軽い悪意さえ感じられる。

さらにつけ加えるならば、ここで語られている妻との話し合いは、夫が妻の言い分を一方的に受けいれている姿が暗示されている。夫婦の間でじゅうぶんなコミュニケーションがとれていない例となっている。ここに夫婦間の「冷ややかで絶望的な溝」(新田 448)を見いだす人もいるほどだ。じゅうぶんなコミュニケーションがとれていない夫婦の姿は、もちろん祝福すべきめでたいものではない。

以上の3点、つまり妻の性格上の欠点の指摘、長年連れそった妻に「若い女」という呼び方を使う点、夫婦間のじゅうぶんなコミュニケーションの欠如の暗示は、この短編の性格を考えたととき、読者には違和感が残る。なぜなら、この短編は、結婚式に出席する代わりに、結婚をお祝いするために書かれた作品(87)だからだ。この作品は、ハッサンも指摘しているように(Hassan 271)、結婚を祝福するための、一種の祝婚歌(epithalamion)なのである。だとすれば、20歳前の若い花嫁に読ませる言葉としては、妻のことを「思わず息をのむほど判断の公正な若い女」という言い換えは妥当性を欠いている。同時に、夫婦間にじゅうぶんなコミュニケーションが存在していないことを暗示することも適切ではない。このときの語り手は、結婚を言祝ぐ物語という物語の主旨が理解できていない。祝婚歌の語り手という自分の立場が理解できて

いない。1950年の「私」は祝婚歌の語り手としての精神的なバランスを欠いているのだ。

以上から、この作品の冒頭の1950年の語りの部分と、1950年の語り手が語る1945年の物語の前書きの部分と1945年の物語の冒頭部分とから、1950年の「私」は、語り手としての正常な精神のバランスを欠いていたと推測できる。

言い換えれば、1950年の「私」が語り手として精神的に完璧な状態ではなかったと考えられる。つまり、戦争による神経症に苦しんでいた1945年の時だけでなく、1950年の時点でも、「私」は精神のバランスを時として欠くことがあったと考えられる。

たしかに、休戦から5年がたち、「私」は退役して故郷のニューヨークに戻って、妻と一緒に暮らしている。日常生活にとくべつ波風が立っているようには描かれていない。だから、1950年の「私」が時として精神のバランスを欠くことがあったと考えるのは、強引すぎる無理な解釈だと思う人がいるかもしれない。しかし戦争による神経症のむずかしさは、まさにこの点にある。たとえばホールデン(Wendy Holden)は、戦争による神経症を扱った本の中で、英国人女性の興味ぶかいコメントを紹介している。第二次世界大戦中に10代であったその女性は、戦争による神経症の患者が入院していた病院が主催するダンスパーティに友達と一緒に何度か参加した。その時の患者の印象を「私たちはその男たちを病気とかとは思っていなかった。・・・(中略)・・・ 幾人かはちょっとばかり変(a little bit strange)だったけれども、私たちが対応したほとんどは正常な人たち(normal people)でした」(Holden 123)と語っている。そして「わたしの友人のうちの一人か二人はその男たちの幾人かにすっかりこころ惹かれていた」(Holden 123)とも語っている。このように、病院に入院中の患者ですらも、たいていは「正常」に見えて、思慕の相手にすらなれるほどののだ。まして退院している場合は、戦争による神経症の症状がいつも明白に出ているわけではない。時たま出るのだ。

戦争による神経症による症状のこうした特徴を考慮すれば、戦争による神経症に苦しんだ経験をもつ「私」が、ニューヨークで妻とともに暮らしていても、時として精神のバランスを崩すことがあったとしても不思議ではない。そう考えると、「私」がエズメの結婚式への出席を断念した理由は、義母が4月下旬に2週間滞在することが先に証明したように本当の理由ではないとすると、「私」が時として精神のバランスを欠くことにあった可能性がある。「私」が語らなかったエズメの結婚式への列席を断念した本当の理由は、「私」自身が、自分が現在も精神のバランスを時には欠くことがあるという自覚だったのではないか。つまり、妻と「かなり徹底的に」話し合うなかで、そのことを妻に指摘されたからだったと考えられる。おそらく、妻に「現在の精神状態では、あなたが英国での結婚式にひとりで行くことは不安がある。あきらめた方がよいでしょう」という主旨のことを言われて、「私」自身も、その妻の言葉に確信をもって反論できなかった。だから、エズメの結婚式への出席を「私」が断念したと考えるのだ。

しかし「私」は、これから結婚式を挙げる若い花嫁に、自分が精神のバランスを崩すときが

現在でも時としてあるから出席できないという事実をあからさまには語りたくなかったのだ。それは、おめでたい結婚式における花嫁にたいする配慮から生まれたものかもしれない。また、1945年の物語で、エズメからの手紙と贈り物によって、戦争神経症からの回復を予感したという「私」の物語上での主張を完結させるためにも、神経症がまだつづいているとは言いたくなかったからかもしれない。あるいは、自分自身にたいするプライドから自分が現在も苦しんでいる神経症のことは言いたくなかったからかもしれない。いずれにせよ、作者サリンジャーは、エズメの結婚式への出席を断念した理由が、義母が2週間来るという理由ではないことが注意ぶかい読者には分かるように「私」に語らせている。そして戦争による神経症に今も苦しんでいることが本当の原因だと分かるように語らせている。

そのことをもう少し詳しく考えてみよう。1945年の物語では、先の要約でも示したように、戦争による神経症に苦しむX軍曹の姿が詳しく具体的に描かれている。X軍曹は除隊になる前から、今の言葉でいえば、戦争によるPTSDに苦しんでいたのだ。そのことが分かる。

そして戦争によるPTSDは退役後も帰還兵士を苦しめることがあるのは現在ではよく知られている。もちろん、そうした帰還兵士の苦しみは、この作品が書かれた1950年代にも存在していた。

帰還兵士のそうした苦しみに、著者サリンジャーは関心をもっていた作家だった。たとえば、サリンジャーはすでに『ニュー Yorker』誌の1948年1月31日号に、短編「バナナフィッシュに最適の日」を発表している。この短編の主人公シーモア(Seymour)は、X軍曹と同じく、ヨーロッパ戦線で精神が傷つき病院で治療していた経験をもつ。そして帰国して妻と一緒に暮らしているが、ときどき常軌を逸した変な行動をして、妻の両親を心配させている。妻の母親によれば、専門の医師も「軍がシーモアを病院から退院させたのはかんぜんな犯罪(a perfect crime)である」(“Bananafish” 6)と考えているだけでなく、「シーモアは自分のコントロールをかんぜんに失うかもしれない」(“Bananafish” 6)とも考えている。結局、医者と母親の不安は的中して、最後には、保養のために来ていたマイアミのホテルで、シーモアは、妻が寝ているベッドの隣で拳銃自殺する。休戦から約3年後の1948年3月のことだった(*Franny* 62)。自殺の原因については何も語られていない。しかし現代の読者ならば、シーモアが戦争による神経症に苦しんでいたのを知らされていて、一方で、戦争による神経症の患者がとつぜん「原因不明」の自殺をするのを知っているから、シーモアの自殺は戦争神経症による自殺だった推測できる。

軍曹であったサリンジャーも、X軍曹と同じく従軍中の1945年5月に精神を病んで入院した経験をもつ(Alsen 380)。そのサリンジャーが、帰還兵士の戦争による神経症によるこうした苦しみに関心をもち、それをテーマとする作品を「エズメに」(1950年)の直前の1948年には発表していたのだ。

だとすれば、「エズメに」の主人公「私」も、米国に帰還後も戦争による神経症に苦しんで

いた可能性がある。そう考えれば、1950年の「私」による1945年の物語の前置きの部分の謎めいた「反事実」の解説も、先にも指摘しておいたように、戦争による神経症のひとつの現れとして解することができる。この前置きの部分の1950年の「私」は、このときバランスのとれた完全に正常な精神状態ではなかったことを、作者サリンジャーは、作品の中間に置かれた明白な「反事実」で暗示しようとしていたと考えるのだ。読者は、1950年の語り手によって語られるその明白な「反事実」の明白さ直面して、「なぜそんな事実に反することを言うのだ？なぜだ？」と立ち止まることが求められている。そして、それを手がかりに、もう一度この作品を読みかえすことになる。するとこの作品の冒頭の部分からも明らかなように、1950年の語り手の「私」が精神のバランスを時に欠くことがあるのを発見するのだ。サリンジャーは技巧的な手慣れの作家なのである。

IV

この作品は、初めに指摘しておいたように、1944年、1945年、1950年という3つの時間と、米国、英国、ドイツという3つの国を場面に行っている。ただし、この作品の大部分を占めるのは、1944年の英国での話と1945年のドイツでの話である。そしてその英国とドイツとの話を読む限りにおいて、批評家たちがこれまで指摘してきたように、この作品は少女の真心と愛に満ちた手紙と贈り物によって、戦争で心が傷ついた兵士が救われる物語と解することができる。しかし原文で合計してもわずか29行であるが、米国に住んでいる1950年の語り手のことが語られている。わずか29行だから、1950年の語り手の「私」に関心がこれまで向かなかったのは仕方ないともいえる。しかし1950年の「私」の語りからは、これまで分析して指摘してきたように、1950年の「私」が1950年の時点でも、まだ戦争による神経症の影響によって、正常な精神状態を欠く時があるのが明らかになっている。

その点に注目するならば、この短編は、終戦から5年にもなり、妻と一見平和に見える暮らしを続けながらも、戦争による神経症からまだ完全には回復できていない帰還兵士の苦しみを描いている作品となる。たしかに、この帰還兵士の苦しみというテーマは、繊細で共感する心をもつ魅力的な少女によって精神的に傷ついている人間が救われるという、この作品の目立つテーマの影に隠れがちである。それは認めざるをえない。しかし作者サリンジャーが、この作品が短編であるにもかかわらず、時間や場所を様々に変化させ、語り手に事実に反す明白な「反事実」を語らせたのは、1950年の語り手の「私」が現在でも戦争による神経症の後遺症に苦しんでいるという事実を伝えるためだったのだ。

休戦から5年もたつて、戦争による神経症に苦しむ帰還兵士がいまだにいたことが、この作品が発表された1950年ごろには世間では次第に忘れ去られようとしていた。そんな時に、サリンジャーは、明白な「反事実」を1950年の「私」にさりげなく語らせることによって、今も後

遺症に苦しむ兵士がいることを、注意ぶかく作品を読む読者に訴えようとしているのだ。

1950年の「私」は、戦後5年が経ち、ニューヨークのセントラルパークの近くの高級住宅地で不自由のない生活を送っているように見える。義母が2週間も「私」の家に滞在するのを望んでいることから推測できるように、戦場から生きて帰ってきて以来、それなりに安定した平和な生活を送っているように見える。しかし「私」は、「ぜがひでも」列席したいと考えていたエズメの結婚式への出席を断念せざるをえない。エズメは、戦場に投入される直前の「私」に、美しいつまでも残る記憶を残してただけではない。戦争によって神経がふかく傷つき、絶望のただ中にいた「私」に、井出もいうように(井出 7)、ふたたび生きようとする気力を誘発させてくれたのだ。言わば、現在の「私」の命の恩人である。そんなエズメの結婚式に「ぜがひでも」列席したいと考えるのも当然だ。しかし「私」は断念せざるをえない。その決断が苦しいものであったのは間違いない。「私」のその苦しみが、間接的ではあるが、1950年の「私」の語りからは読みとれる。

一見すれば、平和で順調な家庭生活を営んでいるように見えても、その内実では、戦後5年もたつのに、その平和な世界をかんぜんには享受できない帰還兵士がいることが描かれている。そして世間はそんな帰還兵士がいることを忘れている。戦後わずか5年しかたっていないのに、もうすでに戦争の後遺症に苦しんでいる元兵士がいることを忘れているのだ。

実際、1998年に出版された本の中で、米国と英国とで少なくとも約20万人の第二次世界大戦の元兵士が、現在でも、つまり戦後約50年たっても、精神的な治療を受けている事実が紹介されている(Holden 136)。多くの人がその数字に驚かざるをえないだろう。戦後50年たっても約20万もの帰還兵士が戦争による精神的な後遺症に苦しんでいる事実、わたしを含めて多くの人は無知だったのだ。実は当たり前だが、日本でも帰還兵士の苦しみは続いていた。1971年の段階で2つの国立療養所だけでも167人の精神を病んだ元兵士が入院していた(樋口 142)。さらに終戦から69年たった2014年でさえも、第二次世界大戦を戦った帰還兵士238人が今なお戦傷で療養していて、その内の13人が精神疾患で治療を受けていたのだ(神戸新聞)。

私たちは、無意識的であるにしる意識的であるにしる、自分たちが知りたくない事実には目を向けようとしな。それだけではなく、忘れようとするのだ。私たちはそういう利己的な生き物なのだ。この作品は、こうした忘れっぽい世間と人間の存在とをあらためて読者に示している作品でもある。だからこの作品に、そういう忘れっぽい世間と人間とにたいする作者サリンジャーの違和感を読みとることも可能だと思われる。

〔注〕

- (1) ミラーもこの部分の不自然さに気づいている。しかし「私」がX軍曹に変更されている点にのみ注目して、「反事実」を述べていることには注目していない。つまりミラーは、「体験があまりにも切実で耐え難いものであったので、語り手はその体験を匿名性のなかに包みこみ、三人称で語ることでその体験から自分自身を切り離さなければならなかった」(Miller 22)と解して

いる。同様の解釈は別の研究者にも見られる（新田 452-53）。しかしより重要な点は、3人称で語られていることよりも、「私」は巧妙に変装しているからどんなに賢い読者でも「私」の正体は分からないだろうと語っている「反事実」の方にある。

- (2) サリンジャーのドイツ人の妻シルヴィア(Sylvia)も1946年6月の段階ですでに航空機を利用して故国に帰国している(Shields 185)。
- (3) 「私」の妻がファッションブルなレストランのシュラフツ(Schrafft's)のなかでも特別なセントラルパークの近くの店(*Encyclopedia* 1048)常連だった(91)ことから分かる。
- (4) 1944年4月の段階ですでに結婚していて(95)、そしてその時点で「3年間」(87)軍隊にいて、それから「6年」(87)が経過している。つまり軍隊に入隊しているさなかに結婚したとは考えにくいので、結婚して9年以上が経過していると考ええる。

〔引用文献〕

- Alsen, Eberhard. "New Light on the Nervous Breakdowns of Salinger's Sergeant X and Seymore Glass." *CLA Journal*. 45.3 (March 2002): 379-87.
- Antico, John. "The Parody of J.D. Salinger: Esmé and the Fat Lady Exposed." *MFS* 12.3 (Autumn 1966): 325-40.
- The Encyclopedia of New York City*. Ed. Kenneth T. Jackson. New Haven: Yale UP, 1995.
- Hassen, Ihab. *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel*. 1961. Princeton: Princeton UP, 1973.
- Holden, Wendy. *Shell Shock*. 1998. London: Channel 4 Books, 2001.
- Miller, E. James, Jr. *J. D. Salinger*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1965.
- Salinger, J.D. *The Catcher in the Rye*. 1951. Boston: Little, Brown, 1991.
- . *Franny and Zooey*. 1961. Boston: Little, Brown, 1961.
- . "For Esmé - with Love and Squalor." *Nine Stories*. 1953. Boston: Little, Brown, 1981. 87-114.
- . "A Perfect Day for Bananafish." *Nine Stories*. 1953. Boston: Little, Brown, 1981. 3-18.
- . "Pretty Mouth and Green My Eyes." *Nine Stories*. 1953. Boston: Little, Brown, 1981. 115-129.
- Shields, David and Shane Salerno. *Salinger*. London: Simon & Schuster, 2013.
- Siddiqi, Asif. "The Beginnings of Commercial Transatlantic Service." *U.S. Centennial of Flight Commission*. Web. 16 July 2017.
- Slawenski, Kenneth. *J. D. Salinger: A Life*. New York: Random House, 2010.
- Wenke, John. "Sergent X, Esmé, and the Meaning of Words." *Studies in Short Fiction* 18.3 (June 1981): 251-59.
- 井出達郎「遅れた手紙、壊れた時計——J.D.サリンジャー「エズメに——愛と悲惨を込めて」における祈りの時間性」『東北学院大学論集(英語英文学)』98号2014年 1-18頁。
- 高橋美穂子『J.D.サリンジャー論——「ナイン・ストーリーズ」をめぐって』桐原書店 1995年。
- 神戸新聞「太平洋戦争の戦傷病で療養、全国でなお238人」2016年8月18日。
- 田中啓史編著『イエローページ サリンジャー』荒地出版社 2000年。
- 新田玲子『サリンジャーなんかこわくない』大阪教育図書 2004年。
- 樋口健二『忘れられた皇軍兵士』こぶし書房 2017年。

(のま しょうじ 英米学科)

2017年11月13日受理